

色彩表現の指導に関する研究

千葉県立〇〇高等学校 〇〇 〇〇 (芸術科 美術)

1 はじめに

授業の中で、「絵の具の扱いに不慣れな生徒が多い」と感じたのが、このテーマを取り上げたきっかけである。

前任校では工芸を担当していたため、10年ぶりの美術指導となった。久しぶりの美術での感想は、絵の具を扱うことに対し、あからさまに気が進まない態度を示す生徒が目立つということであった。「最終的に絵の具で仕上げる課題である。」と告げた途端、げんなりする様子を見る度、こちらも残念な気持ちになった。出来上がった作品を見ても、絵の具の体験不足に由来する拙さの目立つ作品も多く、これでは絵の具を忌避するのやむを得ないと感じられた。

色彩表現は美術において欠かせない作業であり、造形の基礎である。「絵の具嫌い」から、色彩表現への苦手意識を抱き、絵画嫌い、美術嫌いになってしまうことは避けたい。「色を塗る」という表現の入り口で躓いている生徒に対し、技術面での具体的なアドバイスを通して問題を解消させ、うまく描けたという成功体験を積ませることで、着彩への抵抗を失くしていきたいと考えた。

また、着彩の技術は、幾度もの失敗を繰り返す中から自ら解決策を発見し、経験を積むことで技能を修得していくものである。着彩経験の少ない生徒に、授業展開を通し、繰り返し絵の具を体験させることで、実践的に技能を修得させることとした。

ここで取り上げるのは、絵の具を使った授業の1年間の実践例である。

2 美術 I での年間計画

平成21年度1年生の着彩を含む題材と配当時間および評価規準は次のとおりである。

	1 学 期	2 学 期	3 学 期
題材	切り絵とアニメキャラの構成	魚のレリーフ	風景のソラリゼーション
配当	8時間	16時間	10時間
題材の 評価 規準	関心・意欲・態度 切り絵や画面構成に関心を持ち、構成や着彩に意欲的・主体的に取り組む。 芸術的な感受や表現の工夫 切り絵や画面構成の楽しさを味わい、アクリルガッシュの特長を生かし、感性を働かせて配色を工夫しようとする。 創造的な表現の技能 アクリルガッシュの適切な扱い方を理解して創造的・効果的に着彩する。 鑑賞の能力 自他の作品から配色や構成の美しさを感じ取り鑑賞することができる。	関心・意欲・態度 彫塑に関心を持って、立体・彩色の表現に意欲的・主体的に取り組む。 芸術的な感受や表現の工夫 魚をデザインすることの面白さを感じ、形体や模様、配色を工夫しようとする。 創造的な表現の技能 塑像の表現を楽しみ、素材の特長を生かして、効果的な表現する。 鑑賞の能力 自然物の美しさを感じ、自他の作品から表現の工夫や美しさを感じ取り鑑賞することができる。	関心・意欲・態度 風景の作る光と影の美しさに関心を持ち、混色を工夫し意欲的に色彩表現に取り込む。 芸術的な感受や表現の工夫 見慣れた風景の美しさに気づき、風景を捨象強調し、感性を働かせて表現をする。 創造的な表現の技能 色の調和を考えて配色し、風景の構成要素を単純化して効果的に表現する。 鑑賞の能力 自他の作品から風景の表現や彩色の工夫を感じ取り鑑賞することができる。

着彩にはアクリルガッシュを使用している。例年全体の3分の1の生徒は、中学校で購入した絵の具セットを継続して使っている。3分の2の生徒は、アクリルガッシュに初めて触れるので、その扱いに慣れるための題材を1学期に設定した。2学期は彫塑と着彩を組み合わせた題材、3学期はデザイン的な表現技法と絵画的な表現技法を工夫できるような題材で、1年間の計画を立てた。

3 切り絵とアニメキャラの構成

(1) 題材の内容

B4のコピー用紙を三角形や長方形に折って切込みを入れ、再び広げた切り絵模様と、拡大したアニメキャラクターを組み合わせ、構成・彩色する題材である。平成21年度に初めて実施した。

生徒の多くが、折り紙を三角形に折って切り込みを入れ、模様を作ったという経験があり、この作業は生徒にとってなじみのあるものである。授業では切り方の例を示したプリントを配布し、それを参考に切り絵を切らせた。子供のころにやった単純な切り絵とは違い、複雑な模様が出来ること面白さを覚えたのか、予想を超えて熱中して作業に取り組む生徒が多かった。(図1)



図1 切り絵(生徒の切ったもの)

誰もが知っているアニメキャラクターとして、ドラえもん、アトム、クレヨンしんちゃんを用意した。

画面を構成する上で顔だけが目立ってしまうことを避けるため、顔の全面が画面に入らないように拡大した5パターンのプリントを用意した。ほんの一部だけで元のキャラクターが誰か判別できるような、できるだけ誰もが知っているものにした。

選んだアニメキャラクターをケント紙に転写し、その上に切り絵を重ねていく。切り抜いてあるので、少しずつずらして丁度いいポジションを探りながら、感覚的に画面を構成していくことができる。

配色・着彩について、①出来るだけチューブのままの色を使わず、混色すること、②似た色相の組み合わせは調和の取れた配色となること、さらに相対する色相を組み合わせるとアクセントになること、③白や黒を混色することで彩度に変化をつけることが出来ること、などを説明した。色彩計画をアイデアスケッチなどで練らせることはせず、色見本から調和を考えて4～5色程度を選びその色で着彩するようにした。また模様が重なった箇所は元の2色を混色すれば透明感が得られることを伝え、試してみるように勧めた。

(2) 生徒作品と生徒の感想

モチーフの構成要素にアニメキャラを採用したことで、選択したキャラクターが作品に影響して、出来上がった作品の性格づけに一役加わることになった。ドラえもんの笑顔が垣間見えるだけで、とたんに楽しい雰囲気絵になる。一方アトムはまじめな感じがするし、しんちゃんとはぼけた味が出る。切り絵の形や配色に隠れて、あまり目立たないこれらのキャラクターだが、画面を性格づける構成要素となっている(図2)。キャラクターが入ることで、明快で暖色系の色づかいを選ぶ生徒も多かった。



図2 切り絵とアニメキャラの構成の生徒作品

よくできた作品。絵の具の扱いにも慣れていて、細かなところ、細い線も手を抜かず丁寧に仕上げている。色数の多い作品もあるが、明度差をつけてうまく処理している。切り絵とアニメに主従をつけて計画的に配色されている。

いま振り返ると、1年生の初期に課す題材としてはやや難しい課題であった。画面構成についても配色についても、解決すべき要素が多く、どういう作品を目指せばいいのか、分からないまま描き進める状態の生徒もあり、生徒個々のこれまでの経験によって作品の出来が決まってしまうことになった。中には切り絵が上手く出来たため多くの切り絵を盛り込みすぎて、着彩での細かい作業が続き、「1年間で一番つらい課題であった」と後で洩らす生徒もいた。

授業後に自己評価と感想を書かせた。その結果を見ると、切り絵や構成での自己評価が高く、反面、着彩・配色に満足していない生徒が多かった。（「上手くいった」「まあまあ上手くいった」と答えた生徒の合計値を数字で表記すると、切り絵 78.7%，構成 62.3%，着彩 45.9%，配色 44.3%である。）

具体的な記述では、「配色の全体的なイメージが浮かばず難しかった。」「出来上がった作品

を見て、色のセンスがないと感じた。」「切り絵は、重ねて配置したり、置く場所を工夫したりしたのでうまくできた。配色はイメージがはっきりしないまま塗り始めてしまい、まとまりのない感じになった。」など、着彩に関して不満を感じている回答が目立った。「課題が面白かったか」という質問では、88.5%の生徒が「面白かった」「まあまあ面白かった」と答えており、着彩・配色に困難さを感じたり、完成作に納得いかない思いを抱いたりしているものの、生徒は概ね楽しんで制作できたようだ。

4 絵の具の失敗

どのようなトラブルから絵の具に対する苦手意識を抱くのだろうか。今回の題材の中で見られた失敗例をピックアップした。

(1) はみ出し・塗り残し

- パレットで絵の具を混ぜて、ぼったりと筆に絵の具がついたまま、筆先を整えずに、すぐに画面に描き始めてしまい、はみ出してしまう。
- 描きやすい方向に用紙を動かすことをしない。その結果、はみ出して雑に見えてしまう。
- 中央から塗り始めて輪郭の端まで十分塗りきれず、塗り残しが白く目立つ。塗り残しに無頓着で、大体塗れていることで満足してしまい、詰めの甘い作品となる。

(2) 絵の具の分量不足・塗りむら

- 塗る面積に対し、絵の具の量が少ないため、絵の具が足りなくなる。絵の具が足りなくなると、水を足して薄い色で塗り伸ばし、塗りむらが出来てしまう。あるいは新たに作り直すたびに同じ色が出来ずに色むらになってしまう。
- パレット上での混色が不十分で塗り進むうちに色が変わってしまい、平滑な塗りにならない。

(3) 混色によってできる色をイメージできない。

- どの絵の具を混ぜるとどんな色になるかイメージできず、色づくりを楽しむことができない。つい安易にチューブのままの色で済ませてしまう。
- 混色の経験不足から思い通りの色を作れない。多くの生徒は「赤と青を混ぜると紫になる」といった、混色の知識はあるのだが、具体的に絵の具を混ぜたときの色をイメージできない。

(4) 配色の失敗

- 色相の組み合わせの効果を考えずに、すべての色相を満遍なく配色しようとする。
- 彩度を調節せず、高彩度の色を多用して、キラキラした画面になってしまう。

(1)～(3)は、絵の具での着彩の経験不足に負うところが大きい。絵の具の苦手意識が強く、丁寧に塗ろうという意欲の見られない生徒でも、1度きれいに塗れた成功体験を得ることで、次もまた上手く塗ろうという意欲を見せる。

また、筆の使い方、塗る手順、混色の仕方など、個々の生徒の躓きを見つけて、実際にやって見せることが、具体的な理解に役立つ。

(4)の配色については、指導法が難しく、生徒個々の試行錯誤に委ねている現状である。効果的な配色や美しい組合せの作品を鑑賞させ、どのような感覚で色を選び、配色しているのかを理解しやすい言葉で示すことで、配色の工夫とはどのようなことなのか、色彩感覚の手がかりをつかめるよう指導することが必要である。

5 絵の具アンケート

1年の美術選択者に絵の具についての次のようなアンケートを実施した（表1）。

	非常に そう思う	わりと そう思う	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない
絵の具で塗るのは好きだ。	4.8	2.74	38.7	25.8
絵の具で塗るのは得意だ。	8.1	22.6	32.3	33.9
下書きはうまくいくが、絵の具で塗ると失敗する。	35.5	41.9	16.1	1.6
絵の具を準備するのが面倒くさい。	19.4	37.1	29.0	12.9
後片付けが面倒くさい。	32.3	32.3	22.6	11.3
混色するとき、何色と何色を混ぜればよいのかわからない。	30.6	37.1	21.0	9.7
どの色で塗っていいかわからない。	37.1	19.4	35.5	6.5
水の加える量がわからない。	25.8	22.6	41.9	9.7
思ったよりも濃くなってしまふ。	14.5	29.0	46.8	6.5

表1 絵の具アンケート（9月） 回答を数字（%）で示した

絵の具が好きかどうかを男女別に見ると、男子は「好き」「嫌い」がほぼ半々であったのに対し、女子では80%が「好き」と答えており、「嫌い」という女子は0人であった。女子の方が絵の具好きということが明白にあらわれている。男子もことさら嫌いというわけではない。一方「得意」「不得意」については、男女とも「不得意」の割合が高く、男子では73%の生徒が苦手意識を持っている。（グラフ1）



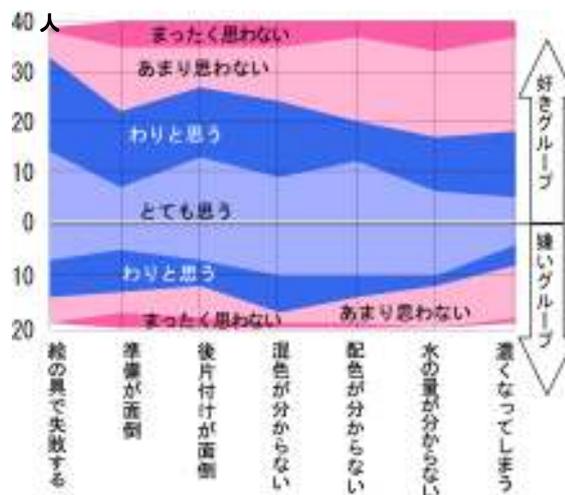
グラフ1 男女別の好き嫌い・得意不得意 (%)



グラフ2 好き嫌い・得意不得意の相関 (人数)

グラフ2は「好き・嫌い」「得意・不得意」の相関である。「不得意」という生徒は「好き」から「嫌い」まで満遍なく分散している。「絵の具は苦手だけど好き」という生徒もいるということが言える。グラフ3は、「好き・わりと好き」「嫌い・あまり好きではない」のグループ別に集計したものである。好き嫌いに関係なく「下絵ではうまくいくのに絵の具で失敗する。」と感じている生徒が多いことが読み取れる。

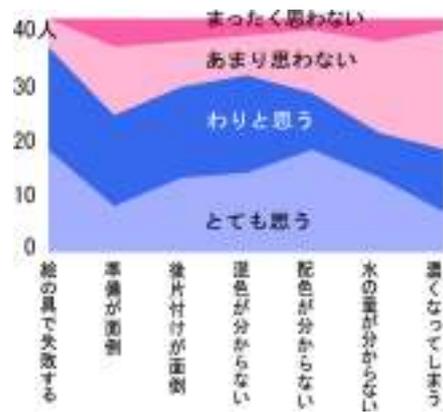
着色の度に「また上手いかなかった」という思いを繰り返し抱いたり、絵の具が好きにもかかわらず苦手意識を持ってしまふ生徒に、もっと着色に親しみを感じさせるように、生徒の技



グラフ3 好き・嫌いで分けたときの集計結果(人数)

能を高めることが不可欠である。

さらに、「不得意」グループ 40 名の集計結果から、苦手意識の原因は、「混色」「配色」の方法が分からないことによると判断できる（グラフ 4）。「嫌い」グループの集計からも同様の結果を得た。このことから「混色」「配色」ができるか否かで、得意不得意、好き嫌いが決まることが推測される。この問題を解決することが、苦手意識解消の鍵となりそうである。



グラフ 4 不得意グループの集計結果

6 魚のレリーフ

(1) 制作手順

前年度までは、生のアジをモチーフに、色も形もリアルな魚（図 3）を作らせていたが、今年度は「多彩な色や形の魚を構想する」という題材を行った。

前段階として、魚の構造を理解させるため、小アジをひとり 1 尾ずつ配り、淡彩で描かせた。その際に、魚のエラを開いたり、背びれを立たせたりして、魚の構造を観察させた。口を大きく開かせたダイナミックさは、実際にやってみなければ分からない。こうした体験から、魚の持つ生命感を実感できたことだろう。



図 3 リアルに作ったアジ

次に、画像をもとに魚の形態や色彩についてイメージを広げさせるため、魚のカラー写真をコピーした 24 種類のサンプルを見せて、作る魚の形を検討させた。併せてレリーフのベースとなる板のデザインをさせ、シナ合板をカットする。ベースの上に石膏粘土で魚の形を成形、目にはビー玉か直径 7～8 mm の透明ビーズを埋め込ませる。胸ビレなどは別にして乾燥させてからボンドで貼ってもよい。

乾燥後、彫刻刀で細部を仕上げ、サンドペーパーで整形し、必要に応じてさらに粘土を盛り付けて修正し、粘土での成形は終了である。

(2) 混色を試そう①

絵の具アンケートの結果、混色のできる色がイメージできない生徒が多いことが分かったので、「魚のレリーフ」を進めながら、混色についての 2 つの教材を行った。

ひとつ目は、混色イメージを持たせるため、水彩色鉛筆を使って混色を試した（図 4）。2 色の色鉛筆でグルグルと重ねて描いた上に、水を含んだ筆で濡らすと、薄暗い色合いであった色鉛筆の彩度があがり、鮮やかで澄んだ発色となる。その発色の変化にも生徒たちは興味を持ったようだ。出来上がったときの、水で滲んだパッチが並んでいる様子が思いがけず美しい。



図 4 混色を試そう①

(3) 混色を試そう②

「絵の具セットの 12 色をそれぞれ混ぜるとどんな色になるのか」を、一覧表になるように

着彩させた。始めのクラスにはリーグ戦の対戦表のような形式（図5左）で塗らせた。丁寧に塗ると手間と時間が掛かるにもかかわらず、出来上がりは色が濁って見え、作業量の割に残念な仕上がりとなった。

この点を改良し、塗るスペースを円形にして、色もすっきり見えるように、色の配列をパソコン画面上で試行して決めた（図5右）。この方がずっと塗り易く、配色も美しい。どちらも色相順で、配列にも大差はないが、仕上がりはかなり違ったものとなった。ちょっとした教材ではあるが、工夫を加える余地はあるものだと改めて思った。

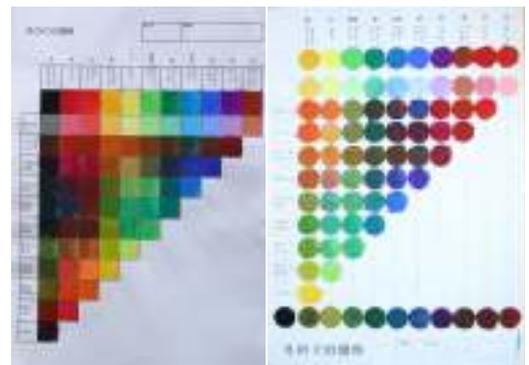


図5 混色を試そう②
対戦表型混色表と丸型混色表

(4) 模様と色の計画を立てる

最初の時間に描いた下絵を4面コピーし、模様と色のデザインを4案考えさせた（図6）。彩色には色鉛筆を使用した。

色相を分類するとき、「暖色」・「寒色」という分け方は、生徒にとって感覚的に分かりやすくなじみのある概念である。今回は「暖色」・「寒色」のどちらかを中心に、色相を制限した配色を考えさせた。模様についても、ストライプ、オールオーバー、ドット、リピート、リズム、アクセントなどの基本的な作例を示した。

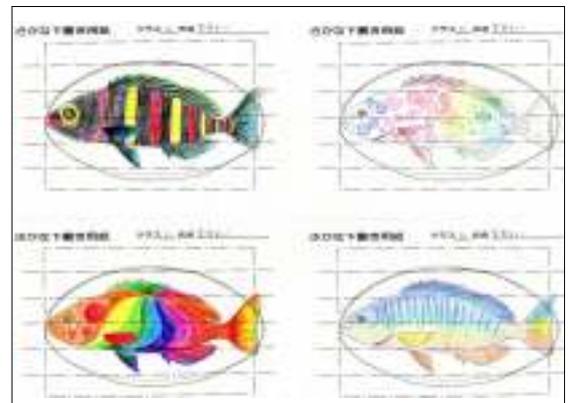


図6 模様と色計画

4つのプランを考えることで、多様なバリエーションを発想させ、形や色に修正を加えながら、アイデアを深化させデザインを洗練させていくことを狙った。なかなか狙い通りに進める生徒は少ないが、自分の作品と向き合い、試行錯誤させる過程を大切にしたいと考えている。

(5) 生徒作品と生徒の感想

配色に関し色相を制限したことで、前回の課題に比べ調和の取れた作品が多かった。

制作過程の自己評価では、「塑像が上手かった。」という回答が83.1%と最も高く、それには及ばないものの、着彩では66.1%、配色では72.4%の生徒が「上手かった」と答えており、色についても自分の作品を肯定的に評価している生徒が多い。前回の「切り絵とアニメキャラの構成」と比べて、配色について49.2%、着彩について53.1%の生徒が今回の方が良かったと評価している（グラフ5）。

配色	今回の方がよい	両方がよい	両方が悪い	前回の方がよい
	49.2%	4.8%	10.9%	31.7%
着彩	今回の方がよい	両方がよい	両方が悪い	前回の方がよい
	53.1%	6.3%	14.3%	29.7%

グラフ5 前回の課題との比較（%）

「前は色のバランスが上手く出来なかったけど、今回は青系にしたのでまとまりが出てよく出来た。」「色の混色と組み合わせが魚にマッチして上手かった。」と肯定的な意見がある一方、「全体的に1つの色（青）に偏りすぎてしまったので、いくつかの色を使うべきだった。色の塗りわけをもう少しはっきりとしたかった。」「前回より色が地味になり、出来もいまいちだった。」などの記述があった。

そのほかに「いろんな色を混ぜてみて新たな色を発見できた。」「色を作るのが好きなので楽しかった。」「自分のオリジナルの色を、作った魚に塗るのが楽しかった。」などという好意的な感想が見られた。課題については59.6%の生徒が「面白かった」と答えている。

12色では出せない色を補うため、「ピンク」、「オペラ」、「クリムゾン」などの絵の具を用意したが、色を消化しきれず、ピンクが目立ちすぎてしまった作品もあった。また、塗り方が平板なため立体感を殺いでしまい、軽い印象の作品も散見された。

図7に示す作品の中には、グラデーションによる表現や、魚の模様点や線の描き込みを施し、描画の変化を付けているものがある。このように塗り方に一手間かけることで、色彩表現に重厚感が出て、レリーフであることの説得力をさらに強めることができる。



図7 魚のレリーフ 生徒作品

塗り方に工夫を凝らすとともに、塑像においても、胸ビレや尾ビレの立体間の強調、ヒレや口など1部を板からはみ出させての構成、模様の彫り込みなど、造形に変化をつけ楽しんで作っている様子が伝わってくる。

7 風景のソラリゼーション

(1) 携帯電話で撮影した写真資料で風景画を描く

白井高校は、千葉ニュータウンの一角に位置し、近隣にはナシ農家も多く、開発中の新しい街と昔ながらの農村風景を併せ持つ地区にある。通勤の道すがら目に触れる風景に心惹かれ、転勤した年の秋にはこの題材を実施した。見慣れた風景でも、視点を変えることで、そのよさを再認識できる。たとえば、光と影でとらえることで、日常のありふれた風景の中に、普段見過ごしている美しさを感じ取ることができる。

授業の事前準備として、授業に入る前に生徒は通学路など目に触れた風景を携帯電話のカメラで撮り、授業用に開設したメールアドレス宛に添付して送る。写真は教師があらかじめプリントしておき、それをもとに風景画を描く。これを始めた4年前のカメラ機能では拡大に耐えない写真もあったが、今ではだいたい使えるようになっている。また、生徒の多くが普段から携帯電話に風景写真をストックしており、それを使う生徒もいる。

写真を撮る時の注意として、①晴れた日に撮る、②光と影がはっきりしたものを撮る、③主題となるものがあるとよい、④高画質で撮影するほうがよい、などを指示し、写真を用意させる。生徒が送ってくる写真が絵にしやすいとは限らない。こちらでも相当数の写真を用意しておく。(因みに、自分で用意した写真を使用したのは66名中18名で、ほかは教師が用意した資料を使った)。送られた画像をA4判にカラー印刷し、さらにA3判に拡大した白黒コピーも用意する。ここまですべて授業前に準備しておく。

(2) 着彩の指導

A3の白黒コピーを直接ケント紙にトレースする。輪郭で明確に区切り、あいまいな陰影もはっきり区別させるなど、要素を単純化し、平面的でシンプルな色彩表現を念頭に置いて作業をさせる。

着彩するときの注意として、チューブの色をそのまま使わず、混色して自然な色を目指すよう伝える。また、たとえば木の幹を茶色で塗るといった、概念的な色にならないように注意する。前回作った混色表を参考に、カラー印刷と見比べて色を作る。これまでの題材に比べ写真があるので、各自が意識して混色を試行している。タッチを工夫した作品もあり、表現技法の面でもさまざまなバリエーションが見られた(図8)。

(3) 生徒作品と生徒の感想

この課題では元になる写真があるため、一から配色を構想するわけではない。生徒の感想からも、自然体で課題に取り組めた様子が伺える。「今まで以上に上手くできた。特に太陽は乾かした筆を使ってうまく描くことができた。」「影の色など、微妙な変化が難しかったけど、思ったより上手くできた。」「空や木を大まかに描いたけど、かえって効果的に見えることに気づいた。混色もわりと上手くいったので、楽しんでできた。」など、仕上がりに満足感を得た生徒が多かった。

混色・着彩に関しての感想も多く、「混色した絵の具をさらに混色することで、想像のつかない色が出来て楽しかった。」「空の色に黄緑を入れて作ったらいい色が出来た。」「2色か3色は色を混ぜるよう工夫した。」「空の塗り方に変化を付けすぎてミスった。いろいろ混色を試して、適した色を作った。」「暗い雲の色を作るのに空が青いので青を混ぜて作った。」「水面を描くという超難関なことになってしまったが、色を重ねて塗ったことで上手くできた。」など、自分の制作過程を振り返り、絵のディテールに触れて、具体的な感想を記入した生徒が多かった。

た。これらの感想から、「どう描けばいいのか」頭をフル回転させ、試行錯誤しながら制作に取り組む姿が眼に浮かんでくる。

着彩については 74.5%、「自然の色を作れたか」では 64.4%の生徒が「上手くいった」、「まあまあ上手くいった」と答えている。「課題が面白かった」という回答は 54.4%であった。



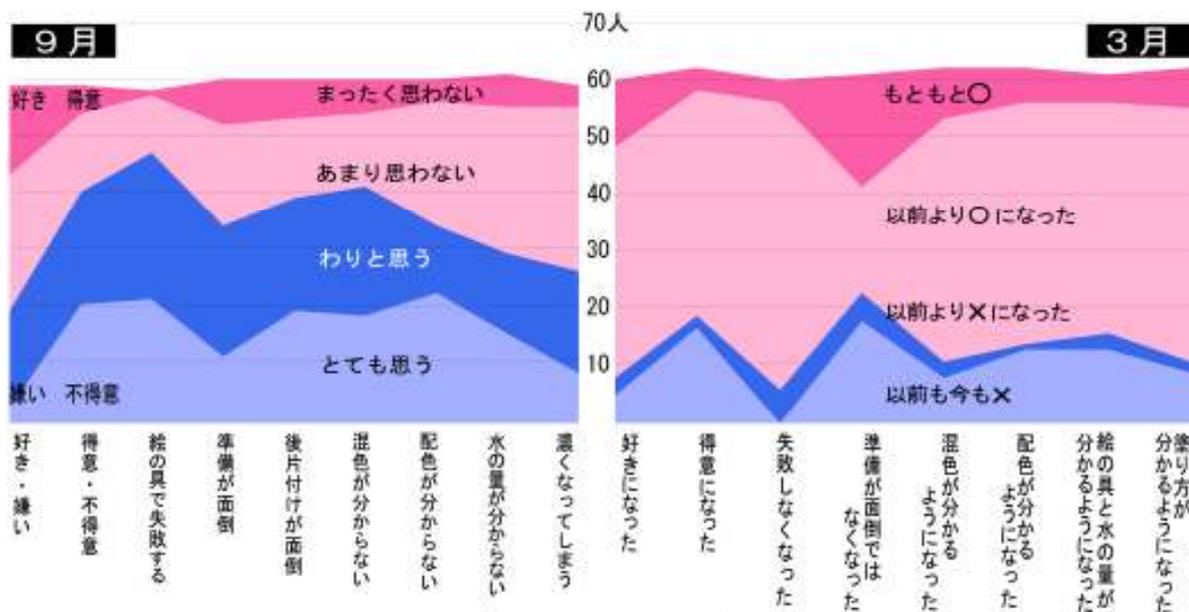
図8 風景のソラリゼーション 生徒作品

8 絵の具アンケート2

3月に再び絵の具についてのアンケートを実施した（表2）。

以前より絵の具で塗るのが好きになった。	もともと好き 19.7	以前より好きになった 67.2	以前より嫌い 4.9	前も今も嫌い 8.2
以前より絵の具で塗るのは得意になった。	もともと得意 6.3	以前より得意になった 63.5	以前より苦手になった 3.2	前も今も苦手 27.0
以前より絵の具での失敗が少なくなった。	もともと失敗しない 6.6	以前より失敗しなくなった 83.6	今も失敗する 9.8	
以前より絵の具の準備が面倒くさくなくなった。	もともと面倒ではない 32.3	面倒でなくなった 30.6	もっと面倒 8.1	今も面倒 29.0
混色するとき、以前より何色と何色を混ぜればよいのかわかるようになった。	もともとわかる 14.3	大体わかるようになった 68.3	もっとわからなくなった 4.8	今もわからない 12.7
どの色で塗っていいかわかるようになった。	もともとわかる 9.5	大体わかるようになった 68.3	もっとわからなくなった 1.6	今もわからない 20.6
使いやすい絵の具と水の分量がわかるようになった。	もともとわかる 8.1	大体わかるようになった 66.1	もっとわからなくなった 4.8	今もわからない 21.0
筆の使い方・塗り方がわかるようになった。	もともとわかる 11.1	大体わかるようになった 71.4	もっとわからなくなった 3.2	今もわからない 14.3
1年間授業をやって感じる絵の具の使い方、配色の仕方など、自分の中で変化したこと・感じたことなどを書いて下さい。				

表2 絵の具アンケート（3月） 回答を数字で示した（%）



9月と3月の結果を併催した。それぞれ赤系が肯定的な回答、青系が否定的な回答を示す。

グラフ6 アンケート集計結果

結果は、9月のアンケートと比べ格段の変化を見せ、6割以上の生徒がすべての項目で肯定的な評価を付けている（グラフ6）。特に「以前より失敗しなくなった」は8割を超えた。「今までは絵の具がすごく苦手で、準備も面倒だったけど、以前より思った色を作れるようになった。」「チューブのままの色で使うのではなく、いろいろ混ぜて新しい色を見つけるのが楽しかった。」「はじめは混色が分からなくて、単色で塗ってしまうことが多かった。徐々に混ぜる色が分かってきて、混色できるようになったことが嬉しかった。」「描く絵や色によって塗り方を変えるようになった。」「授業をして少しだけ塗り方や配色に分かるようになり、細かいところまで気付くようになった。」「配色は以前よりうまくなった気がする。ムラなく塗れるようになった。」などの感想から、技術面の問題が解消でき、混色・配色に自信を付けてきたことが分かる。何より楽しんで着彩を行っているのが伝わってくる。

「絵の具は好きではない。躓いたところから下手になった。」「絵の具の配色は未だに分からない。美術は好きだけど得意じゃない。」など、率直な意見を書いた生徒もいる。安直に上達す

ることではないので、試行錯誤を繰り返すことにも楽しさを見つけれれば良い。

9 おわりに

1年間の実践を振り返って、生徒の作品や授業への取り組み方、またアンケートなどから、絵の具の扱い方や着彩の技法について、一定の成果を得られたように思う。特に、作品への取り組み状況は、課題を追うごとによくなってきたことを実感した。着彩の手順や技能を理解することで、見通しを立て計画的に作業を進めていくようになった。混色でも、経験を積んだことで、出来上がる色の混色イメージができ、自主的に色づくりを楽しめるようになってきた。

最後に、1年間の授業を通して、着実に力を付けた3名の生徒作品を取り上げる(図9)。

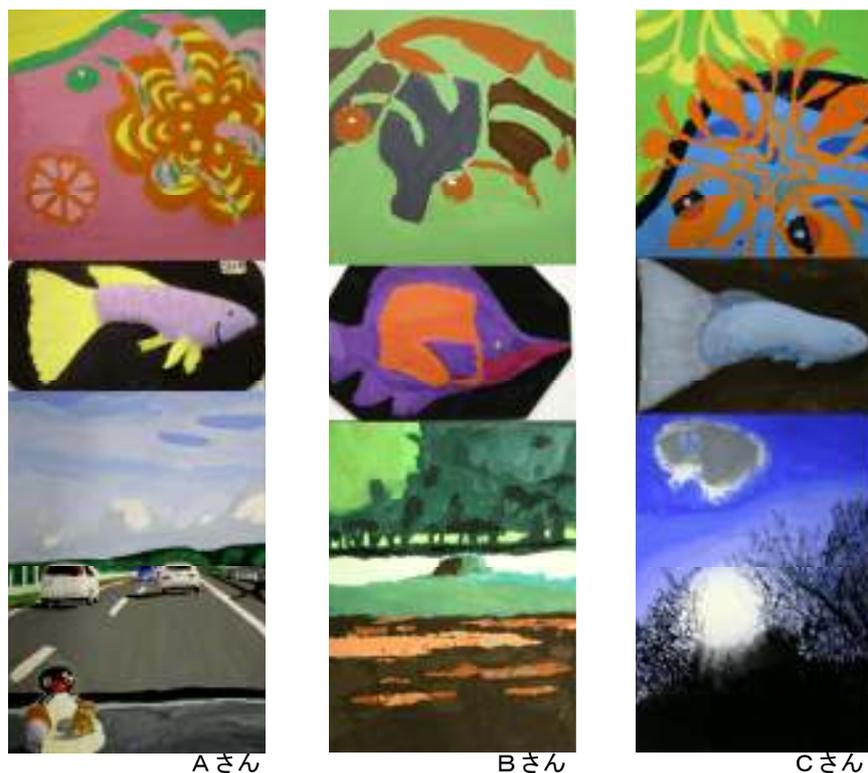


図9 年間作品

Aは活発な女子生徒である。授業後の自己評価に「風景画で才能が開花した感じ。」とあり、風景画の課題を機に自信を持って制作に取り組むようになった。その後の授業では、さまざまなアイデアを作品に生かそうとするようになり、周囲の生徒にも刺激を与えている。

Bは、あまり目立たない男子生徒で、美術に対して積極的ではなく、作品を提出することで満足していた生徒であった。

風景画では、塗り残しをなくすようアドバイスしたこともあり、細かい部分まで手を抜かず仕上げることができた。丁寧な作業の結果、作品の完成度が高まることが実感できたようだ。それ以後、助言を積極的に生かし、妥協せずに制作に取り組むようになり、完成度に対する貪欲さが出てきた。

Cは、制作にまじめに取り組むものの、なかなか上手くいったという実感を持たずにいた。風景画では、明快でシンプルな色づかいにまとめながら、何度も筆を重ねて描き込んでいる。描画の中でドライブラシの技法を自ら発見し活用することもでき、「絵の具を使って塗ることが以前より得意になったのは何よりうれしかった。」という感想を書いている。成功体験により得られた自信は表現意欲に直結する。それ以降も一つ一つの作業に注意深く時間をかけるようになり、納得するまで主体的に取り組めるようになった。

この他にも着彩を面白いと感じることで集中力のついてきた生徒も多い。どのような造形力を身につけさせるか、狙いを明確化し課題を工夫することで、生徒の能力を引出していきたい。

参考文献

南雲 治嘉 著『色彩デザイン配色技術専門マニュアル』グラフィック社

大竹 誠 著『初めてデザインを学ぶ人のために』論創社

視覚デザイン研究所 編『7日間でマスターする配色基礎講座 (Design Beginner Series)』